重心児者へのアイトラッカー・支援機器活用研修会

NPO法人 Rumah kita
〒063-0052　北海道札幌市西区宮の沢２条１丁目1-30-109

助成事業の概要

支援機器（＝Assistive Technology以下AT）を活用することで、重い障害があってもコミュニケーションを豊かに行い、学び続け、できる力を生かして社会参加することが可能になってきています。近年はこのAT機器の中でも特に「視線入力によるPC操作」が注目されており、随意的に手足を動かすことが困難な状態であっても、視線の動きによって様々な活動を行うことが可能となっています。

このことから、アイトラッカー活用に対する研修会を開催し、機器導入や活用について、学校関係者だけではなく、保護者をはじめとして支援に関わる人全てが学ぶ機会を作るための研修会を行うこととしました。さらに、体を動かすことが難しくても、コントローラーの工夫や支援を行うことで対等に参加することが可能なeスポーツをテーマに、重心児者が社会に積極的に参加できる環境を創り出すために必要な支援について、学び考えるきっかけ作りのための研修会を企画しました。

【実施日】2022年7月17日（日）
【会場】ACU-A札幌　16F多目的ラウンジ／後日視聴
【講師】伊藤史人氏（島根大学・助教）
田中栄一氏（北海道医療センター・OT）
【内容】第一部・視線入力、始めてみよう！遊んでみよう！
第二部・eスポーツで広がる世界～誰もが参加できるために～

事業の成果

研修会には、重心児者当事者家族、医療型児童発達支援・放課後等デイサービス等の福祉施設スタッフや管理者、特別支援学校教員、看護師、セラピスト等、様々な属性の方々に参加いただくことができました。直接対面による参加者は26名で、熱心にメモをとりながら講師の話に聞き入る様子が見られました。また、当日の様子を録画し、後日動画視聴を可能としたことで、北海道外からも視聴の申し込みをいただき、全体で56名の方々に参加いただく事ができました。

第一部では、伊藤史人氏より、視線入力を導入した事例から、「見えていない」「理解していない」とされてきた重心児者が、EyeMoTゲームを通して「周囲の事が理解できている」ことがわかり、更なる学習に繋がっている様子や、第三者も重心児者の能力を客観的に理解できる実例の紹介が行われました。また、EyeMoT対戦ぬりえの大会の様子から、重心児者の家族も地域問わず繋がり、交流する様子も紹介され、「支援者への支援」の視点の重要性を示していただきました。

第二部では、伊藤史人氏と田中栄一氏による対談形式で、「e スポーツ」をキーワードに支援のあり方や、重心児者当事者の社会参加の有効性や課題について意見交換や情報の共有、課題提起が行なわれました。

様々な支援機器を活用することで、楽しみながら成功体験を積み重ねることが可能となり、さらなる学習意欲も引き出されると考えられています。特に視線入力を使った支援においては、これ

まで「何もできない」と見られ、常に受動的な生活を送り続けていた重心児者が、自ら発信する手段を持つことができるという可能性を秘めている事が示されました。また、周囲の支援者も、オンラインやSNSを通じて繋がりあい、互いに励まし合える関係性が築いていけることも講演の中で示していただきました。

また、会場では視線操作により描いたデザインで作ったアクセサリーや小物を展示し、来場された方々に実際に見ていただくことで、重い障害があってもできる力を発揮し、保護者や支援者が一緒に楽しみながら新たな作品を作り出している様子も知っていただく機会になりました。

成果の広報・公表

終了後に行ったアンケートでは、今後早速アイトラッカーを療育や生活に取り入れたいという回答や、重心児者の可能性を引き出し、活用するためにアナログ・デジタル問わず支援の手立てを考えていきたい等の回答が寄せられました。また、「スポーツ」という言葉の定義について新たな視点を得る事ができたという回答や、テクノロジーの発達により、体を動かす労働に限らない、多様な働き方の可能性が広がることを感じたという回答もありました。さらに、全体を通して重心児者やその家族・支援者がそれぞれに孤立しない・させない取組の重要性についても改めて考える事ができたという回答も頂きました。これらのアンケート結果は研修終了後講師へ直接お伝えするとともに、HP上でも公開させて頂きました。全体として参加者の満足度は高く、研修で得た知見や内容を次の活動に繋げていただける機会ができたと考えております。

今後の展開

この研修に参加していただいた重症心身障害児者に関わる保護者・支援者、学校関係者等が機器活用への理解を深めるとともに、当事者の「できる力」を可視化し、その後の支援の質を高めることができるようになると考えています。

現状では、支援機器を活用した学びや生活の多くは特別支援学校内に限られる事が多く、学校教職員向けの自主研修の機会は多く見られるようになりましたが、このような支援について「知りたい・学びたい」と考える保護者や支援者も多く見られます。

このことから、保護者、福祉施設または事業所のスタッフ、学校の教職員、医療関係者等が日頃の支援についてともに考え、学びあう機会を作ることで、当事者を中心としたより良い「関わり合い」を創り出すことができると考えます。

当法人では、引き続き多職種機関同士が楽しみながら学び合う機会を作り、当事者を笑顔で包み込むネットワークづくりと、家族や支援者の「自分たちも、チャレンジしてみよう」という前向きな気持ちを支えることにつながると考え、引き続き活動を続けていきます。